意見 判断 連載⑭⑦

満洲国とは何だったのか

日本人が学び取るべき歴史の教訓

モンゴル史学者
宮脇淳子

みやわき・じゅんこ――昭和27年和歌山県生まれ。京都大学文学部卒業、大阪大学大学院博士課程満期退学。博士（学術）。専攻は東洋史。大学院在学中から岡田英弘・東京外国語大学名誉教授にモンゴル語、満洲語、中国史を、山口瑞鳳・東京大学名誉教授にチベット語、チベット史を学ぶ。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員、常磐大学、国士舘大学、東京大学などの非常勤講師を歴任。著書に『真実の満洲史』（ビジネス社）『満洲国から見た近現代史の真実』（徳間書店）など多数。

なぜ日本は大陸に進出し満洲国をつくったのか

〝満洲国〟と聞けば、多くの日本人が、おそらく軍部が暴走してつくった傀儡国家、日本の大陸侵略の悪しき象徴というイメージで捉えていることでしょう。あるいは、「満洲国など聞いたこともない」という若い人もいるかもしれません。

しかし、結論から言えば、そうしたイメージは一九一七年のロシア革命を起源とするマルクス主義の進歩史観、戦後の自虐史観に基づく偏った歴史観によるもので、満洲国の実像とは異なります。

私は戦前の日本、満洲国を手放しで賞賛するつもりはありませんが、満洲について研究していく中で、現在の日本人がいかに歪んだ視点で歴史を捉えているかを痛感してきました。見失ってはいけないのは、歴史上の出来事には必ず理由があるということです。

そして、その因果関係をイデオロギーに左右されずに明らかにするのが、本来の歴史学なのです。

当然、日本の大陸進出、満洲国建国にも理由がありました。

日本が満洲（中国東北部の旧称）に進出したのは明治期に遡ります。二十世紀初頭、ロシアは中国や朝鮮など、東アジアに勢力を伸ばしており、これを恐れた日本とイギリスは日英同盟（一九〇二年）を結んでロシアに圧力をかけました。ロシアは満洲からの撤兵を約束したものの、その約束を反故にしてしまいます。これが日露戦争の原因となり、日本は自国の安全保障上、ロシアに対抗するため満洲まで兵を進めることになったのです。日本が出ていかなければ、満洲・朝鮮半島はロシアの一部になっていたことでしょう。

日露戦争後のポーツマス条約によってロシアが敷設した東清鉄道の、ハルビンと長春の真ん中以南の営業権を得た日本は、一九〇六年に南満洲鉄道会社（満鉄）を設立。以後、日本政府と満鉄は当時不毛の土地だった満洲に莫大な投資を行い、その発展に大きく貢献していきます。

当初、満洲で日本人の居住地は線路や駅の周囲と限られていましたが、満鉄は炭鉱開発、鉄鋼業、港湾、ホテル、航空会社の経営に着手。大連、奉天、長春の近代化・都市計画を進め、上下水道、電力、ガス、港湾、学校、病院、図書館などを整備しました。

一九一五年、対華二十一ヵ条の要求が調印されると、日本人の南満洲における自由な移動と居住が認められ、在満日本人は急増していきました。

ところが、そこに歴史を変える重大な出来事が起きます。一九一七年のロシア革命と、一九二二年のソビエト社会主義共和国連邦の誕生です。ソ連の重要な目的は中華民国を共産化することでした。

ソビエト政府は一九一九年、「カラハン宣言」を出し、日露戦争後、満洲やモンゴルでの互いの勢力圏を定めた日露秘密協定を暴露し、この取り決めを無効としました。そして中華民国との関係を緊密化すると共に「満洲は中華民国の一部」というそれまでなかった考えを中国人に植えつけ、日本を満洲から追い出そうと工作を始めたのです。

それまで日本の明治維新を見習って近代化を進めていた中国人は、ソ連の工作により一気に反日に転じ、満洲は中華民国のものだとして、満洲の国権回復運動を始めるようになります。そして激しい日本人排斥の動きから満洲への投資先を守るため、日本は一九三二年、清朝最後の皇帝だった溥儀を執政にし、満洲国を建国したというのが一連の経緯です。

ですから、満洲国建国の要因は、ロシアの革命派が中国のナショナリズムを煽ったことにあったといえます。

戦後の進歩史観や自虐史観では、満鉄をつくった時、すでに南満洲を全部領土化しようとしていた、関東軍が暴走したなどと言われていますが、実際には一九一九年を境に満洲を取り巻く状況が一変したのです。

日本の満洲統治は西洋列強とは全く違った

また、戦後教育では、日本は溥儀を無理やり執政にして満洲国をつくったなどと教えられてきました。しかし、事実はそうではありません。溥儀は三歳で清朝皇帝に即位したものの、辛亥革命で退位を余儀なくされ、中華民国が成立した後、大分経ってから袁世凱との約束が破られ、紫禁城を追い出されます。溥儀が助けを求めて駆け込んだのが日本の公使館でした。

そして溥儀は天津租界に匿われた後、もう一度皇帝に就くことを夢見て、〝自らの意思で〟満洲へと向かい執政に就いたのです。

さらに、ローマ法王庁に始まり、イタリア、スペイン、ドイツなどヨーロッパの先進国を中心に当時の世界の三分の一の国が満洲国を承認しました（最新の研究で、ローマ法王庁は正式には承認していない、とあるのですが、通説に従っておきましょう）。

満洲国建国の要因を含め、こうした歴史の事実を知れば、満洲国に対する印象、見方は大きく変わってくるはずです。

ちなみに、溥儀は日本が戦争に負け満洲国が崩壊した後、ソ連に抑留され、ソ連から東京裁判に出廷しました。彼の証言は保身に終始し、戦前に自分の意思で行ったことをことごとく否定するもので

太枠で囲まれた部分が当時の満洲国
（宮脇氏著『日本人のための世界史』【KADOKAWA】より転載）

1920年代と思われる満鉄奉天駅。駅前広場の右より、三等改札口周辺は乗降客や客待ちの馬車、人力車で溢れている ©朝日新聞社/時事通信フォト

第12回 2024年

『心に響く小さな5つの物語』読書感想文コンクール

作品募集中!!

2010年に始まったこのコンクールも第12回を迎えます。
『心に響く小さな5つの物語』読書感想文を通じて、

「本を読む喜び、楽しさ、感動」

にふれる子ども達が一人でも増えることを願っております。
本コンクールへのご応募を心よりお待ちしています。

応　募　要　項

応募資格／**小学生・中学生・高校生**

課題図書／**『心に響く小さな5つの物語』**
『心に響く小さな5つの物語Ⅱ』
『心に響く小さな5つの物語Ⅲ』
いずれか1冊の感想文を800～1000字で書いてご応募ください。

応募期間／**2024年10月31日(木)まで**（当日消印有効）

応募方法／郵送、FAXまたは弊社ホームページよりご応募ください。
※感想文とは別に、お名前・年齢・性別・ご住所・電話番号を記載してください。

応募宛先／［HP］右記QRコードよりアクセス
［FAX］03-3796-2107
［郵送］〒150-0001
東京都渋谷区神宮前4-24-9
(株)致知出版社
「心に響く小さな5つの物語」感想文コンクール係

優秀作品／●［金賞］1名、図書カード5万円分　●［銀賞］1名、図書カード3万円分　●［銅賞］1名、図書カード1万円分
結果発表／『致知』2025年2月号（2025年1月1日発行）　弊社HPでは2025年1月掲載予定

この件に関するお問い合わせ◉致知出版社書籍部 TEL03-3796-2118

した。日本を悪者にして生き延びようとしたのです。ソ連の監視下で行われた彼の嘘の証言が、戦後の日本の自虐史観を裏づけるものとされてきた事実を、いま一度思い起こす必要があります。

もう一つ知っておかなくてはならないのは、台湾統治も含め、日本の満洲経営は、西洋の植民地政策とは根本的に異なっていたということです。国家予算に匹敵する投資を満鉄建設に注ぎ、近代的なインフラを整備した日本と、現地人の生命や労働力、富を情け容赦なく収奪した列強との違いは明らかです。

実際、敗戦で日本が満洲から去った後、満洲国のダムや製鉄所などのインフラ設備、劇場や映画館などの文化施設を引き継いだからこそ、中国、朝鮮は近代化することができたのです。この事実はほとんど知られていません。

「五族協和、王道楽土」という国家理念を掲げ、発展していった満洲国には、漢人、満洲人、モンゴル人、朝鮮人、日本人などいろいろな民族が集まり、共存していました。もちろん全員ではありませんが、多くの人が理想に燃えて純粋に満洲国建国に邁進したのです。

もし日本が戦争に負けずに満洲国が存続していたら、いま頃はアメリカのような多民族国家として発展していたことでしょう。

歴史を正しく見、自虐史観から脱却を

ただ一方で、負の歴史、日本人が反省すべき点も私たちは直視する必要があります。

例えば、これは満洲国建設だけでなく韓国併合にも言えることですが、日本人はしばしば相手の歴史や文化伝統を考慮せず、日本人の価値観をよかれと現地の人々に押しつけてしまう傾向があることです。善意の押しつけは、決して褒められたことではありません。「日本人が入っていけばもっといい国になる。国民も幸せになる。相手に国づくりができるはずがない」というのは、日露戦争の勝利体験に基づく傲慢さです。

また、満洲国独立が宣言された翌一九三三年、関東軍は満洲国に隣接する熱河省に侵攻、占領地を拡大しました。国際的非難が高まり、ついに国際連盟総会は日本軍の満洲撤退を可決するに至ります。

後の日中戦争に繋がるこの「熱河作戦」の背後には「熱河はもともと清朝皇帝一族の領地であり、父祖の地を取り戻したい」という溥儀の主張がありました。

政府内で根強い反対意見があったにもかかわらず、溥儀のこの主張に乗ってズルズルと領地拡大をし、泥沼に陥っていった関東軍にも、日露戦争の勝利体験による驕り、さらにその土地に住む人々の複雑な歴史や文化への無理解があったと思います。

そうなった要因には、特に明治維新以降の教育が関係していると私は考えています。明治維新を担ったリーダーは皆、江戸時代の藩校や寺子屋でしっかりした人間教育を受けた人たちでした。しかし、明治維新以降は、帝国大学も陸海軍の学校も、外国語教育と専門教育ばかりに力を入れるようになってしまった。その結果、組織に従順な官僚や幕僚、専門家はたくさん育ちましたが、豊かな教養と見識、胆力を兼ね備えたリーダーが育たなくなってしまったのです。

教育、リーダーの劣化はいまも変わりませんが、それに拍車をかけているのが戦後教育です。

日本の大陸進出、満洲国の歴史も、ロシア革命や共産主義の世界赤化工作の脅威などを含めた世界史的な視点、複合的な視点で見るべきであるのに、「とにかく戦前の日本がすべて悪かった」という短絡的、一方的な視点だけで綴られていませんか。負の部分についても、何ら検証も教訓を引き出すこともなされていません。それではますます日本人は劣化し、自信を失い、弱体化していく一方です。

しかし、その責任は、日本人自身が戦後八十年もの間、歴史の真実や先人たちの苦労と足跡を検証しなかったことにあります。最早、GHQや日教組、近隣国に責任を転嫁することはできません。

誤った歴史観から脱却し、再び日本人としての誇りを取り戻し、日本が強い国として立ち直っていくためには、歴史の因果関係を正しく見、教訓を引き出していくことが求められます。ここに戦後忘れ去られてしまった満洲国の歴史に、いまを生きる日本人一人ひとりが向き合う意義があるのです。

そのために、これからも満洲国の真実を発信し続けていくつもりです。